
翻 訳

古い友人への手紙（前半）

ベルテレ・ブラウンフェルス（旧姓：ヒルデブランド）

最 上 英 明 訳

貴女は私が若いときの話を書き残して欲しいのですね。

思い起こしてみると、貴女にお話する内容は、音楽が私の人生にどんな役割を果たしたかに尽きます。私の音楽への情熱的で壮大な愛の物語。というのも、ひとりの人間がこんなにも深く音楽を愛し、音楽にすっかり浸かった生活をし、音楽から幸福をたくさん導き出しながら、音楽に対して何もしないことができなかったことも、きわめて稀だと思うので。私はヴァイオリン、ピアノ、音楽理論、声楽、対位法、作曲のレッスンを受け、レーガー⁽¹⁾にさえ習ったこともあります。しかしこれらはすべて、私の洞察力、音楽への情熱的な愛、音楽への親密な関係を高めてくれただけで、何もしないことができませんでした。

怠惰だったからか、才能が十分にはなかったからか。きっと両方でしょう。私が大人になった頃には、確かに作曲の能力も尽きてしまったのでしょうか。私の流儀では、進み道もなかったのです。音楽に深く没入していたのですから、それを見つける必要があったのですが。私が鍛錬しなかったのは、怠惰だったからでしょう。しかし私は楽譜を演奏する方が好きでした。私の才能も、職業音楽家になるには不十分でした。楽器に魅了されたのではなく、芸術作品を細部まで知ることによって魅了されていたからです。かなり経ってから作曲や演奏への意欲が目覚めましたが、もう遅すぎました。

（1） マックス・レーガー（1873-1916）対位法を駆使したフーガや変奏曲を数多く作曲したことで知られるドイツの作曲家。

私が7歳になったとき、ベートーヴェンのピアノソナタ第4番の最終楽章を聞いて、心に傷を受けるかのように驚きました。音楽が初めて私に語りかけてくるようだったのです。一番年長の姉によるこのソナタの演奏を耳にしたとき、金縛りにあったかのように魅了されました。そのときから、ベートーヴェンへの圧倒的で絶大な愛が芽生えたのです。10歳のとき、サン・フランチェスコでのカルテットの夕べで聞いた、ハーブ四重奏曲⁽²⁾の緩徐楽章の悲しげで感動的な演奏は、もうあまり覚えてはいませんが、涙を流しながら聞くことしかできませんでした。それほど心を動かされたのです。

1898年、父がミュンヘンに建てた私たちの家での初めての冬、両親が13歳の若いフルトヴェングラーを、公現祭⁽³⁾の祝日に招待しました。両親は彼の音楽の才能を耳にし、非凡な子どもと見なされていたことから、彼を知りたがったのです。

ほっそりして、もうかなり長身でブロンドの魅力的な少年がやって来ました。顔もとても表情豊かでした。もちろん彼が祝日の王様になり、私を女王に選びました。

子どもたちみんなで遊んだあと、彼に質問しました。「もっとも偉大な作曲家は？」ヴィリーは漠然と答えました。「その答えは難しい。バッハ、ベートーヴェン、モーツァルト、ハイドン、シューベルトなどたくさんいるのだから。誰に優位をつけたらいいのだろう」。不満な私は「いいえ、ベートーヴェンがもっとも偉大です」と言いました。私たちらしいやり取りでした。彼は比較が嫌いで、何事もその本質において正当に評価しようとしていました。それで世界がより豊かに見えていたのでしょう。私には、すべての作品がひとつの価値秩序の中にありましたが、個々の作品が互いに否定し合うものではありません。それぞれの作品に、かけがえのない美しさがあって、他のものでは置き換えられません。しかし、すべてが美のヒエラルヒーの中に位置づけられると見ることで、自分が豊かになったように感じていました。それぞれの仕方で完成していることは、その完成の仕方に偉大か凡庸かの違いがあることと矛盾しません。満杯のグラスがあることと、より大きなグラスにもっと水を入れることができることとは、両立します。

(2) 弦楽四重奏曲第10番作品74。

(3) 1月6日。東方の三博士の来訪を記念する祝日。

私の父は、見た目通りの倹約家で、室内楽を聴くことしか許さず、オーケストラやオペラは聴けませんでした。レーヴィが特別に私に《フィデリオ》のチケットをプレゼントしてくれました。（レーヴィは私が作曲した最初の歌曲を気に入ってくれ、私に教える約束もしてくれました。しかし、私が13歳のときに亡くなってしまい、実現しませんでした。）私が若いときに聴いた作品の中では、このオペラからもっとも強い印象を受けました。オーケストラ、歌手の声、合唱、私はこのオペラでどれも初めて耳にしたのです。おそらく、もっとも人間的で、心の奥底にまで入り込んでくるオペラ。ベートーヴェンはモーツァルトのような劇作家ではありませんでした。しかし言葉との感動的な関係を結びました。《第九》でもそれは感じられるし、《ミサ・ソレムニス》では一番よく感じられます。言葉は彼にとっては、他のどの作曲家よりも信仰告白の表現なのです。音楽の言語がドラマとしての現実になると、私は我を忘れたかのようでした。第1幕の四重唱のように、台詞のやり取りのあと、静寂から音楽が湧き上がるときの魔術。静寂が見事でなければ、音楽も素晴らしいものにはならないでしょう。それが、この台詞のついたオペラの最初で最後の秘密でもあるのです。この晩の体験が私にとっていかに重要だったかは、言葉では言い表せません。偉大な力にただただ圧倒され、もちろん私は一晩中眠れず、涙を流していました。

こうした前置きを長々と書いてきたのも、若いフルトヴェングラーと親密になることが、私にとってどんな意味があったかを知ってもらうためです。唯一無二の素晴らしい関係になるだろうと、私は心の準備をしていました。こうした関係を私は貴女に書く約束をしたのですが、残念ながら私には文章の才能が欠けているので、漠然としか書けないでしょう。若いフルトヴェングラーと再会したのは、彼が14歳のときでした。冬にクラインヘッセローアー湖でスケートをし、そこで会ったのです。すっかり成長しきって（すぐ15歳になりました）、すらりと背が高く、もしやもしやとした巻き毛のブロンドの髪。表情豊かで燃えるような美しい眼の上の濃い眉毛。スケートの滑りはしなやかで柔軟。もうすっかり一人前の大人で、潑刺とした印象を受けました。並外れて利口で早熟、とてつもない才能に恵まれた人物であることは疑う余地がありません。行くところ可ならざるはなしといった感じが周囲に漂い、一見して圧倒的巨人の印象を与えることは明らかでした。私は毎日、クラインヘッセローアー湖で

滑り、彼もいつもそこにいました。私と会うのがとてもうれしいように感じました。しかし最初は、偶然に会ったかのように振る舞いました。

ある日、彼の両親のところでお茶を飲もうと誘われました。もちろん、喜んで出かけました。彼の家族からは幸せな印象を受けました。とても好感のもてる独特な父、才能豊かな母、素晴らしい子どもたち。わが友〔フルトヴェングラー〕がもちろん、家族の中心でした。彼の魅力的で若々しい人柄が、卓越した強い印象を与えました。私は彼にうっとりしました。ヴィリーと呼ばれていた彼は、シューベルトのピアノソナタ第12番を演奏してくれました。彼の偉大な才能が、当時すでに私の目の前に立ち現れていました。情熱と造形力に満ちた成熟した演奏で、とても印象的でした。彼は自分の曲は演奏しようとはしませんでした、私の曲は聞きたがり、私は歌曲をみんなに披露しました。ゲーテの詩による2曲の羊飼いの歌を、とても遠慮がちに演奏しました。彼は私をやさしく見つめ、驚いたことに、私の曲を気に入ってくれました。「何とチャーミングな曲だ」と何度も言いました。彼の賛辞に勇気づけられ、私は作曲を続けました。私が彼の演奏を聞き、彼の両親に会ったのも、このときが初めてでした。しかし彼は、家族のことはあまり話しませんでした。私たちの関係はもう、日常生活的で世俗的なことを超越していたのです。大勢のカップルがいるダンスの集いを、彼の母が巧みにセッティングしてくれました。私たちは会えて幸せだったので、とてもうれしかったです。しかし、その後は一緒にダンスにもパーティーにも行きませんでした。

春になると私の両親はフィレンツェへ旅行し、私たちは離れ離れになりました。しかし、数日おきに手紙のやり取りをしました。彼は15歳になったばかりでしたが、驚くほど立派な手紙でした。あらゆる精神的なものに対する温かさや偏見のなさが、彼の判断から感じられました。歴史への生き生きとしたまなざし、ペンテジレアー、およびクライスト全般に対する愛などが書かれていました。「歴史が一番面白いことに気がついた。何らかの卓越した力、優れた人物、一般的な時代背景、個々の事象のつながりの中での時代全体の進展が問題となるのだから。ある人にはまったく馬鹿馬鹿しく思える時代がある。外交上の口論に満ち、ののしり合ったりおしゃべりしたりする数人の女性のような。全体の進展はまったく別の場所で起こるが、そこがどこか

はまったくわからない」。彼は音感についても書いてきました。「私にとって、どの音にも別々の顔がある。調性でもそうだ。もとの調性とは異なった調性である曲を聞くと、まったく別の曲のように思われる」。彼はさらに、私がベートーヴェンの交響曲第7番のスケルツォのようだと、魅力的なことも書いてくれました。彼の手紙には、体験したことがたくさん書かれていて、とても刺激的でした。私たちの関係には、子どものときから精神的な起爆剤があったのです。

私は当時、最初の牧歌劇を作曲していました。姉のリーゼルが歌詞を書いてくれました。作曲によって刺激を受けるのは不思議でした。作曲はどんなレッスンや演奏行為よりも、音楽を深く理解させてくれました。着想に夢中になるのは、秘密に満ちた営みに違いありません。こうして私は、作曲する幸せを味わいました。たとえ単なる無邪気な牧歌劇とはいえ、他の何よりも音楽の神髄を垣間見せてくれたように思えました。ヴィリーはいつも私の作曲を励ましてくれました。私の牧歌劇に純粹で詩的なものを見つけたからです。

秋にヴィリーは父とギリシアへ出かけ、コルフ島から手紙をくれました。「並外れて美しい風景、直截な線と単純な色彩、いずれもドイツではとうてい想像できないくらいの強烈さだ。海の青は紺碧の空と同じ、昨日船の上から初めてそれを見たとき、私は全世界を胸に抱いてもいいと思った。ここの風景は南イタリアより単調に思えるが、豊かだ」。アテネからも手紙をくれました。「私は裸の岩の上に腰を下ろしている。かたわらには廃墟の古い墓碑が立っている。石に彫られたレリーフの人の姿はすっかり摩滅している。大理石を吹き抜ける独特の風の音がする。柱に生える背の高い乾燥した草が、湾曲してサラサラと音を立てる。ちょうど、夕陽が山のうしろに沈む。こうした瞬間に感じる思いを、ロマンティックと呼ぶのかもしれないが、本当に素晴らしい。古代神殿の建築術は、今ではもはやどこにも見つからないくらい、とてつもなく偉大なものだったに違いない。この旅行は最高だ。とくに鉄道での旅。ずっと紺碧の海に沿って走る。やがてパルナッソス山、ヘリコン山脈、キサイロナス山地が見えてくる。すべて岩石の巨大な山岳地帯だ。風景はまったく申し分がない。紺碧の海と明るい光」。

彼はさらに書いてきてくれました。「今回の旅行に、ベートーヴェンの後期の四重

奏曲⁽⁴⁾を持ってきた。ここで楽譜に目を通すのは、素晴らしい喜びだ。まったく完璧な音楽だが、正しく理解するには、詳しく知る必要がある。特に作品 132 のイ短調の四重奏曲[第 15 番]は、あのベートーヴェンが突然ロマンティックになったかのようだ。しかし一見そう思えるだけで、まさにベートーヴェン的で、きわめて非ロマン主義的なところがある」。彼は島全体をひとりで当てもなく歩き回れたので、エギナ島をすっかり満喫しました。彼はベートーヴェンの四重奏曲の他には、ゲーテの詩集だけを持参し、「共感できるところがあまりに多く、この詩をまるで自分が書いたかのように思えてくる。それほど私自身の気分ぴったりだ。あるのは形式と芸術家的な意識」と書いてきました。

それから、作曲したい気持ちが湧いてくるが、まったく満足できないと書いてきました。「私は自分が優れた作曲家になるであろうこと、美しい曲を書けることもわかっている。しかし私の力不足で、その目標に到達できなければ、もっとも不幸な人間のひとりになることもわかっている。その人間は、自分の作品のお粗末な個所にはいつも目をつぶって、何とか耐えることができるのだ」。次のようにも書いています。「ベートーヴェンの四重奏曲を、新しい方法で徹底的に勉強した。とてつもなく偉大で美しい。四重奏曲の何曲かには、ブラームスやシューマンのどの作品よりも、たくさんの芸術世界が含まれている。どの曲がもっとも素晴らしいと言えるかはわからない。どの曲も手にとって読むたびに、一番素晴らしいと思えるのだ。大フーガ⁽⁵⁾も特に見事だと思える。この曲は以前も好きだったが、今になってやっと完全に理解し、楽譜をきちんと読めるようになったと思う」。「ここエギナ島は、今回の旅先の中で一番きれいなところだ。静かで孤独で、自然が素晴らしい。エギナ島全体はかなり大きく、山の多い島だ。かなり高い山がひとつあり、とても荒々しく見える。山地には草木がなく岩だらけだが、数本の松だけが分散して生えている。その眺めは素晴らしく、淡い緑色か、ほとんど淡黄色の葉がついている。オリーブの木も谷間に群生し、イチジクの木やブドウ畑もある。たった今、太陽が雲間から姿を現し、風が松のところに

(4) 第 12 番から第 16 番までの 5 曲の弦楽四重奏曲。

(5) 弦楽四重奏曲第 13 番作品 130 の終曲として作曲されたが、のちに作品 133 として独立して出版された。

私の頭上でざわめく。ああ、素晴らしい孤独の世界だ。願いはひとつだけ。君がそばにいて欲しいこと。毎日、ベートーヴェンの四重奏曲を読んでいる。（ゲーテの詩集は愛読書のひとつ）。彼はその頃、六重奏曲を作曲しました。彼はベートーヴェンの後期の四重奏曲に、青春時代を通して魅了され続けました。彼はエギナ島では15歳でしたが、すでに自分の人生の悲劇を感じていたのです。当時の彼に指針を示していた高い目標には、まず到達できないという。彼の手紙は続きます。「ここでは孤独な羊飼いのような生活だ。たったひとりで茂みや岩をよじ登っては腰を下ろし、牧羊神になったつもりでフルートを吹き鳴らす。でも残念ながらそれは想像だけの話で、森沿いに静かに歩いて来る人などいるはずもない。私が笛を吹いて聴かせたいと思うような人が現れるはずもなく、私はひとりぼっちで悲しくなる」。

このあとの冬 [1902年2月]、私たちは婚約しました。とても無邪気に彼は私を抱擁し、「私たちは永遠に結ばれたのね」と私が言うと、もちろん彼も、そう思っていました。この関係は感動的でもあり、世間離れしたものでもありました。私たちだけが立ち入れる若い豊かな世界、それを光と名づけました。私たちの愛が特に輝き燃え上がると、「光が見える」と互いに言い合いました。

「わが妹、わが花嫁」⁽⁶⁾のような意味での兄と妹のような雰囲気、私たちの愛にはありました。異なっているにしても、心は似かよっていました。大きな愛で深く結ばれ、いろいろな土地を歩き回る男女に似ていました。2人だけで夢中になるのではなく、周囲の素晴らしいものに夢中になりました。主要な分野は音楽で、彼が私を導いてくれました。私たちが20歳のとき、彼は手紙にこう書きました。「私たちが共有する世界がある。私の心からもっとも離れられないもの、他の誰も君のように感じる事ができないものだ。君のすべてがいかに素晴らしいかを突然、そして次第に強く感じたときは、この上ない幸せだった」。

彼はモットル⁽⁷⁾が指揮するコンサートのリハーサルに私を連れて行ってくれました。特にベートーヴェンの交響曲が演奏されるときに。このリハーサルは、私には音楽の

(6) ワーグナーの《ワルキューレ》第1幕のジークムントとジークリンデの兄妹の関係を念頭においていると思われる。

(7) フェリックス・モットル (1856-1911) ワーグナー指揮者として名高かったオーストリアの名指揮者。

神秘に満ちた工房のように思えました。私は並々ならぬ楽しみを味わい、きわめて刺激的でした。オーケストラのサウンドが私にはとても魅力的で、それ以来、ずっと記憶に残っています。この天才的な青年の指導で、私はベートーヴェンの交響曲をすべて、とても詳しく知ることができました。というのも、彼が一度耳にして、深い印象を受けた曲は、何でもすぐに暗譜で弾くことができたからです。

春になると、ヴィリーの先生ルートヴィヒ・クルツィウスが、私の弟の先生にもなりました。この師の魅力や重要性を子どものときからよく認識していたヴィリーは、よき思い出として回想しています。私の両親はフィレンツェに一緒に行くように、クルツィウスに頼みました。フルトヴェングラー一家がヴィリーも一緒に行かせてくれるならという条件で、彼は承諾しました。その話が認められ、クルツィウスとヴィリーはアルチェートリに滞在することになりました。そこに私の将来の義兄弟バルトゥスが、いわゆるガリーナ荘を購入していました。ガッロ塔のすぐ横の古い家で、かつてカリレイも住んでいました。ミケランジェロ広場のすぐうしろです。

ヴィリーはいつも温かな感じを受けるクルツィウス先生を、とても愛していました。手紙でも先生の温かさや好印象について書かれていたし、また最良の友人でもありました。しかし、私たちの関係については、決して話をしなかったように思います。彼がその手の話をしたのは、私の姉のツージだけでした。

サン・フランチェスコを彩り、フルトヴェングラーと私の関係にも理解を示し、彼をとても愛し、私が彼の話をしなくても、私を幸せだと賛美してくれた姉たちについては、何も書きませんでした。私たちの素晴らしい、刺激に満ちたサン・フランチェスコでの生活についても書きませんでした。私たちがイタリアに惚れ込み、その美しさを十二分に楽しんだことは、貴女もよくご存知でしょう。私たちの成長のすべてにきわめて重要だったのです。毎年、春にフィレンツェに着くと、街や周囲の土地の美しさを過分な贈り物として受け取りました。それは貴女自身も体験していることでしょう。ヴィリーは1904年、その印象を伝えてくれました。「フィレンツェと君のこ

(8) ルートヴィヒ・クルツィウス (1874-1954) フルトヴェングラーの父アードルフ・フルトヴェングラー (1853-1907) の教え子の考古学者。後年、ローマの考古学研究所初代所長を務めた。

とを想うと甘い苦しみが伴うが、何度でもそうしてしまう。私が今回、はっきりわかったのは、芸術や美学に純粋に深く関わった生活が私には相応しいこと、そしてそれがいかに幸せかということだ。しかしそれは、イタリア、サン・フランチェスコ、そして君と結びついているので、ここでは私は孤立しているような気がする」。

アルチエトリにある美しい家は眺めも素晴らしく、ヴィリーが作曲できた場所でした。彼の世界の本質的な側面を見せてくれる彼の作曲が私は好きでした。彼の時代には異質の純粋さがありました。

私たちは何時間も郊外を散歩するような交際をし、自然の刺激の詩的な力が私たちを精神的にも力づけてくれました。散歩したのは私たちだけではなく、音楽、文学、絵画の偉大な守護神も一緒でした。私が言いたいのは、自然も芸術活動への刺激として体験されうることです。感覚は多くの場合、芸術によって感受性豊かなものになります。自然への愛は私たちをつなぐ強い絆でもありました。彼にフィレンツェの周辺を案内しました。トスカナ地方の邸宅、詩的な田園風景、見事な松の木の丘。この時期も、彼はベートーヴェンの後期の四重奏曲の総譜から、素晴らしい演奏を聞かせてくれました。彼がエギナ島に持参した楽譜です。これらの四重奏曲の孤独な世界（私は当時「ナイーヴな意識」と呼んでいた）と孤独に満ちた自然の中で触れることは、彼には大きな発見のようでした。

彼が当時知った芸術家では、ミケランジェロにも強い印象を受けていました。彼はこの2人の偉大な天才の世界に魅入られたようでした。そこからスタートするのは彼にはよくないだろうと私の父が言っても、無駄でした。父はまず大局的な視点から物事を理解し、それから職人技的な勉強をするべきで、それを飛び越えて、深く精神化された世界と取り組むことは、青春時代には不可能だと考えていたのです。

20歳までのこうした日々に、深い感銘を無数に受け続けました。私にはまるで、精神活動のすべての領域が開いたかのようでした。この年代の多くの若者が学校で教育を受けるように、私は芸術に没頭し、音楽に陶醉しました。明晰な精神を持ち陽気で元気な性格の私の父が、太陽のように私たちを照らし続けてくれながら、素晴らしい素地を築いてくれたのです。（父はヴィリーをととても愛し、彼の天分を認識し、私たちの婚約にも満足でした。私たちが一番気が合うと思っていたし、私たちの関係も喜ん

でいました。)しかしヴィリーは、別のやり方で私の精神世界を開いてくれました。同年齢の成長を続ける若い彼と一緒に体験をするのは、言葉では言い表せないほど素晴らしく、うれしいことでした。すべてが彼のおかげでうまくいったこともわかっていたし、それを忘れてしまうだろうとは思いません。というのも、彼には立派な世界があり、私はそれにいつも魅了されていたからです。これは私には重要なことで、いつも強く感じていました。私たちの愛も年々強まり、献身的かつ情熱的に彼を愛しました。私たちは、一緒になる日を待ち焦がれていました。それ以外の未来は考えもしませんでした。彼はこの春のイタリア旅行のあと、手紙をくれました。「君のことを思うと、君への愛だけで胸が張り裂けそうだ。どの世界とも私には違和感があり、まったく必要もない。私には君がいるのだから。君をこんなにも愛せるのは、言葉で言い表せないぐらい甘い思いだ。それを以前よりも強く感じる。イタリアでの時間は、本当に素晴らしかった。思い出はもう甘美なものになってしまった。もうこれ以上ないぐらい幸せだった」。

8月にイタリアから戻ると、テーゲルンゼーにあるタンネックを初めて訪れました。彼の両親がそこに建てた別荘が、山に囲まれた湖のすぐ近くにありました。まさにドイツ的世界、『のらくら者日記』⁽⁹⁾に書かれているような「緑涼しきドイツ」なのです。私はイタリアからやってきたような気持ちでした。列車でタンネックまで行くことはできません。

彼が対岸まで船で迎えに来てくれました。彼はとても元気で、いつも胸を張って風を突き抜けるような風情で出迎えてくれました。風でブロンドの巻き髪が乱れていたからです。元気で若々しい活力に満ちた、意気揚々とした姿。私たちはとても幸せでした。さわやかで涼しい湖でボートを漕いでいる間にも作曲のプランや最近の話題を話してくれ、わくわくしました。そこでも私たちは散策をし、山に行きました。彼は特に山の世界を愛しました。山々の広大で孤独な感じが、私などには最初は人間を寄せつけないように感じたのですが、彼はとても気に入っていました。というのも、彼は愛することも決して下手ではありませんでしたが、何か孤独なものを色濃く持って

(9) アイヒェンドルフの1826年に出版された小説。

いたからです。彼の中に互いに相克する何かがあって、それが彼の世界を孤独にしたのです。「幸福である理由が何もなくなれば、私は不幸になってしまう」と言ったことがありますが、あれはいかにも彼らしい言葉だったと思います。私はまったく正反対のことを言いました(私は父の底抜けの陽気さをかなり受け継いだのです)。ヴィーリーは私のそうした点も愛してくれました。

9月にミュンヘンで《フィデリオ》を聞いたことを彼に手紙で報告したら、返事をくれました。「君が《フィデリオ》を楽しんだと手紙で読んで、本当にうれしい。ピツァロのアリアが素晴らしいことは、私もよく知っている。全曲の出だしも素晴らしい。冒頭、導入部としてぴったりだ。《フィデリオ》であのベートーヴェンは、きわめて純粋で人間的な感情を探し求め、すべてをその方向に推し進めた。音楽はほとんど停滞しない」。

私たちは冬にもよく《フィデリオ》を見に出かけました。ベートーヴェンは私たちの精神的な関係において大きな役割を果たしていました。ベートーヴェンへの私たちの愛にロマンティックなものがあつたと考える必要はありません。ベートーヴェンは私たちにとって、古典派の頂点だったのです。

ロマンティックなものと牧歌的なものを同じだと思う人間がいます。私は正反対のものとして、対比させたいのです。シェイクスピアのパーディタ⁽¹⁰⁾、セルヴァンテスのマルセラ⁽¹¹⁾は、詩情に満ちていてもまったく現実的で、メルヒェンのようなものが入り込む余地はありません。ロマンティックなものが利己的な性格を帯びれば、反対に牧歌的なものが瞑想的になります。羊飼いは純真でのどかで、瞑想や省察をする時間を持っています。こうした瞑想と現実の中に、深いつながりを見出します。瞑想的なものは、きわめて現実的な世界に基づいています。「もっとも確実に瞬間を満たす」のが音楽だとゲーテは述べています。常に存在するものは、別のやり方で活性化されます。古典時代の世界が牧歌的なものに着目したのは、偶然ではないのです。ギリシア人もそうでしたし、後期のベートーヴェンもそうでした。芸術で表現される世界は、こうした孤独で素朴な詩情、同時に現実においては醒めた瞑想を牧歌のように生み出

(10) 『冬物語』の登場人物。

(11) 『ドン・キホーテ』に登場する女性。

すことはないからです。

彼が17歳になったこの冬、私たちはモーツァルトのすべてのオペラを聞き、大きな感銘を受けました。彼がミュンヘンにいたので、一緒にいることも多く、私たちの愛は絶頂を迎えたかのようでした。彼はもう子どもではなく、すっかり成長した青年だと想像してみてください。彼の成長は年齢よりも先んじていたのですから。彼の創作活動にとっても、とても実り豊かな時期でした。彼はプランをまとめ、手紙に書いてくれました。「私は合唱とテノール独唱のついた大規模なオーケストラ曲のプランを考えた。たぶん、何かできると思う。テキストは私が『ファウスト』の最終合唱から自分でまとめた。ここに書き留めておこう。

独唱：世界を支配される至高の女王！

青く澄みわたる、広々とした
大空の天幕の中に、
あなたの神秘をお示ください。
男の胸をおごそかに、やさしく動かして、
神聖な愛の歓喜で、
すべてをあなたに捧げるものを、
どうかお認めください。

合唱：あなたが、気高くお命じになれば、

私たちの勇気は不屈となり、
あなたが満足をお与えくだされば、
情熱はたちまちやわらぎます。
もっとも美しい意味で純潔の処女、
栄光に讃えられるおん母、
私たちのために選ばれた女王、
神々に匹敵するお方。

祈禱：悔いを知るすべてのやさしい者たちよ、

救いのおん眼を仰ぎ見よ、

感謝しながら、浄福の掟に
相応しく、身をあらためるため。
心の優れた者は、誰でも、
あなたにお仕えしようと思います。
処女よ、おん母よ、女王よ、
女神よ、恵みを垂れたまえ！

笑うかな、それとも何か言ってくれる？ 私は君に会いたい。ちょっとだけでも。どう思う？ 私には何もわからない。すっかり漠然としている。クルツィウス先生に手紙を書こう。いつも私の曲を気にかけてくれていたから。私は今の自分以外ではあり得ないし、別の音楽を作ることもできないと、何度でも君に言おう」。この作品に彼は魅了され、とりわけ美しく、長い激しい導入部があるこの曲が、私はとても好きでした。リーツラー⁽¹²⁾もこの曲について書いています。作曲家自身は、作曲中はこの曲を愛していました。しかし、やがてかなり不満を感じるようになりました。

1903年の春、彼もフィレンツェへやって来ましたが、短期間だけの滞在でした。そのあと、私たちにとっての素晴らしい夏がやって来ました。彼の手紙です。「ひとりの人間をこんなにも激しく愛することができ、自分のものだとわかるのは素晴らしい。これ以上素敵なことはないと思う。この世にあるもので、君が私にとって一番の幸せの源であることを、どう表現したらいいのだろう。君に接吻したい。泣いてみたい気もする。何をしたいのか、わからない。私には君がいることを、心から誇りに思う。君が作曲したのは、私も夢中になっているからだが、うれしい。合唱曲の仕事で、交響曲のための時間、作曲全般の時間がなくなる。私はすっかり作曲に夢中で、蟻のように勤勉に頑張っている」。

もちろん人間の精神が目覚めるこの時期、情熱的な大恋愛によって感受性もかなり高まりました。愛には大きな価値があり、私たちはこの贈り物をきちんと自覚し、めったにない連帯感をもって暮らしていました。この夏も、私たちは一緒にパルテン

(12) ヴァルター・リーツラー（1878—1965）アードルフ・フルトヴェングラーの教え子。音楽学者。クルツィウスの前任としてフルトヴェングラーの家庭教師を務めた。

キルヒェン近郊のグライナウに住むヘスリーンの⁽¹³⁾ところへ行きました。フランツ・フォン・ヘスリーンは私たちの親友で、一緒に楽しく山を散策したりしました。後期のベートーヴェンの四重奏曲のテーマを吹くヴィリーの口笛で、窓辺の私は朝になると、いつも起こされました。こうした音楽の世界が、彼の精神全体を染め、導いていました。後年の指揮活動で見られたような、音楽への深い全体的な見方もよく感じられました。彼はグライナウで過ごしたあと、手紙をくれました。「君が私の精神活動の世界に親近感を抱いてくれるのはとてもうれしい、と言う必要がある。親近感にはとても重要だ。特に君のような人間とは。君が晩年のベートーヴェンを理解していることもうれしい。私は何事に関しても、君のためだけに生きているのだから。君に何かを見せるのが、私の最大の喜びだ。私に何かを言ったり見せたりしたいと思う、世界中で唯一の人間が君だ。窓辺での朝晩の私の口笛をまだ覚えてる？ ああ、あの日々がまだ続くといいのに」。

彼は情熱的で、感動的なほど幸せな手紙をくれました。「君をこんなにもよく知っているのだから、君への感情がはっきりしてきた。君を意のままにし、支え、所有しているような感じがすると、それだけ一層、君を愛するのだ。さわめて残念なのは、私が見たり感じたりした素晴らしいものを、君に見せられないことだ。私は君だけに、自分が感じている世界を見せてあげられたらいいのに。しかしもういろいろ書いてきたので止める。天気が素晴らしいので、山に登らなくては」。

それから、「もう本来の自分ではなく、愛する君以外のものが占める余地はない。私は山の上において、地上を見晴らしている。夕暮れのぼんやりした光に照らされている。ミュンヘンの方まで見えていると思う。君と会うことができればいいのに。君を心から愛している。私はすべてが混乱している」。また別の機会にも手紙をくれました。「君は私には素晴らしすぎる人間だ。はっきりとそう感じる。宝や宝石を持っているようだ。あまりに大きく美しすぎて、みんなは理解できないかもしれない。私は豊かで幸せな人間だ。合唱にとっても苦勞している。今朝は7時から1時まで、鉛筆を置くこともなく曲を書いた。しかし今度は、インクで仕上げなければならない。いく

(13) フランツ・フォン・ヘスリー (1885-1946) バイロイト音楽祭でも指揮する指揮者になったが、1946年、飛行機事故で亡くなった。

つかの個所は変えなければならないと思う。こうして仕事しながら、いつもたくさん
のことを学ぶのだ」。彼が当時、作曲でも幸せだったのが、貴女にもわかるでしょう。
この夏、彼は親戚の楽長ドールン⁽¹⁴⁾に自作を披露し、彼の交響曲が秋にブレスラウで演
奏されることになりました。それでこの幸せな夏のあと、彼はベルリンへ行かなくて
はならず、長い辛い別れがやって来ました。彼はかなり失望しました。彼の交響曲は
ブレスラウで不評だったのです。彼はブレスラウで病気になり、リハーサルに行くこ
ともできず、私に手紙を書いてよこしました。「昨日のコンサートには、厚着をして、
締め切った辻馬車に乗って出かけた。あまりいい話はできない。最初に驚いたのは、
ホールの響きに潤いも輝きもなかったこと。私がリハーサルに立ち会えなかったの
で、あのドールンがかなり難儀していた。

演奏の出来がよくなかったので、聴衆が理解できなければ、腹を立てるわけにもい
くまい。しかし、第2楽章、アダージョ、終楽章を持って余すことしかできなかったと
は思わなかった。ほとんど誰も拍手せず、私の周囲の人たちはシューシューと音を出
し、不満を表明するだけ。まったく不快きわまる感情だ。かなり苦勞して作ったもの
を、最初から嘲笑するなんて。そもそも、シューシューという音は、悪意に満ちた忌
むべきもの。これですっかり疲れ果てた」。

ベルリンでも彼はかなり失望しました。ヨアヒムは彼の四重奏曲がまったく気に入
らず、メロディーが欠けていると言い、気が狂ったようだと思っていました。ピアノ
はかなり練習しましたが満足せず、アンゾルゲ⁽¹⁵⁾のレッスンを受けました。私には、文
章の才能が欠けているので、これ以上うまくは書けません。個々の出来事を要約し
て、彼の手紙から特に強い印象を受けたことを書きます。

彼は人柄からして、まじめだが陽気な印象を与えました。にぎやかとは少し違いま
すが。非常に非社会的で孤独で、精神性の豊かさが感じられました。品の悪い冗談は
嫌いでしたが、たいそうユーモアのある人でした。ぱっと目立つことこそありません
でしたが、本性の深いところにおいて感じられるユーモアを持っていました。

(14) ゲオルク・ドールン（1867-1942）フルトヴェングラーの母アーデルハイト（1863-1944）の従兄弟。

(15) コンラート・アンゾルゲ（1862-1930）ピアニストで作曲家だが、ピアノ教師として有名だった。

彼の目立った点はやさしさでした。きわめて愛すべき純粋な心から生まれていました。彼の後年の軽率さについてはよく知られていますが、私が特に関心があるのは、彼がいかに献身的で愛情に溢れていたかを、彼の手紙でお見せすることです。信頼感や絶対的な誠実さが彼の性格の中心でした。彼のような我意の強い性格からはほとんど信じられないくらいの、やさしさに満ちた愛情。考えてみれば、彼は子どものときから強情で、自分と意見を異にする人たちと言い合いを始めたなら、スフォルツァンドがいくつあっても足りないくらいだったのですから。それから彼は、すべてを中断し、強い憤りを覚えることもありました。彼は手紙に書いています。「私は完全に君のものだ。君が私の主人で、その逆ではない。君のためには、何でもしよう。よく君のことを思うと、不思議な感情が生まれてくる。君と結びついた昔のものも、すべてそうだ。美しい音楽はすべて、私がまだたくさんの幸せや喜びを味わうことができるかのような感情を引き起こしてくれる」。

私たちの関係に芸術愛好的な要素があったと考える必要はありません。彼はそれ以上だったし、私たちの場合、それはまったく見当違いです。彼は私に、愛においては友愛がもっとも偉大で、熱愛よりも重要だと言っていました。友愛とも呼べないでしょう。彼は熱愛という言葉で別の理解をしていたからです。彼にとって愛はとても深く、ドン・オッターヴィオのアリアのように、「友愛の絆は私たち2人を束縛する」ようなものでした。私にとっては、熱愛という言葉がもっとも素敵なので、愛の絶頂を表す、素晴らしい言葉でした。

【訳者付記】

ベルテレ・ブラウンフェルス（1886-1963）は彫刻家アードルフ・フォン・ヒルデブラント（1847-1921）の五女。大指揮者ヴィルヘルム・フルトヴェングラー（1886-1954）が16歳のときに婚約した女性として知られる。1886年に生まれたフルトヴェングラーは今年生誕125周年を迎えたが、ベルテレ（洗礼名のベルテルと呼ばれることも多い）もフルトヴェングラーと同年に生まれている。ベルテレは1906年にフルトヴェングラーとの婚約を解消したあと、1909年、作曲家ヴァルター・ブラウンフェルス（1882-1954）と結婚した。

今回訳出した「古い友人への手紙」は、1954年にフルトヴェングラーと夫のブラウンフェルスが亡くなったあとの1957年に書かれている。フルトヴェングラーの未亡人エリーザベト夫人により保管されているようで、1964年に出版されたフルトヴェングラーの手紙⁽¹⁶⁾の中で、編者のティースが解説で一部を紹介している。1968年に出版されたヘッカーの資料集⁽¹⁷⁾でも一部が紹介されているが、どちらもベルテレの姪への手記とされている。1998年11月26～29日にイエーナで開催された第2回フルトヴェングラー学会のプログラム冊子⁽¹⁸⁾で、これまで姪への手記とされてきたこの資料が、古い友人への手紙として、初めて全文が紹介された。もちろん、エリーザベト夫人の好意によるものである。

この手紙（手記）は、50年前の出来事を当時の手紙や記憶をもとに書いており、思い出が美化された点多々あらうと思われる。しかし、貴重な資料であることに変わりはなく、日本ではまだごく一部しか紹介されていないのは惜しいので、今回、全文を訳出してみることにした。なお、1998年の学会では、この手紙でも言及されているベルテレが作曲した牧歌劇などの作品も演奏されている。

(16) Wilhelm Furtwängler: Briefe. Hrsg. von Frank Thiess. Wiesbaden 1964. [フランク・ティース編『フルトヴェングラーの手紙』仙北谷晃一訳、白水社、1972年]

(17) Karla Höcker (hrsg.): Wilhelm Furtwängler. Dokumente – Berichte und Bilder – Aufzeichnung. Berlin 1968.

(18) Friedrich-Schiller-Universität Jena (hrsg.): Programmheft der 2. Wilhelm Furtwängler-Tage. Jena 1998.